

青  
あおおに  
鬼  
調  
査  
9

にんぎょうやしき だっしゅつ  
人形屋敷から脱出せよ！

ノプロプス くろだけんじ  
noprops・黒田研二／原作

なみつみ  
波摘／著

すずらぎ  
鈴羅木かりん／イラスト

## 優助

北部小学校の五年生。

レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サツカークラブに入っているが、オカルト調査クラブのメンバーとしても活動している。

## レイカ

北部小学校の五年生。オカルト調査クラブ部長。学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことでないと周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

## スズナ

北部小学校の四年生。オカルト調査クラブのメンバー。夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルト調査クラブに入ることを決意。レイカになついている。





**魔尾町現悩(デンノウ)**——  
オカルトを中心に研究している民俗学者。青鬼に強い関心を抱いており、夏休み明けから北部小学校・オカルト調査クラブの顧問となった。

**たまちゃん**——  
ひとだまのような青い炎を放ち、宙に浮かぶ。レイカたちに協力的だが、その不思議な力を使うためには、大きな代償を支払う必要がある。



**知香**——  
二十年前、家族でまほろば遊園地を訪れた際に事件に巻きこまれ、青鬼の《王種》となった少年。二十年間、「地下の王」として遊園地の地下で孤独に過ごしていた。今はレイカたちと協力関係にある。

## ひろし

北部小学校の五年生。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。



## タケル

ピジョン・フリーゼという種類の犬。人間の言葉をすべて理解しているが、パレると面倒なので秘密にしている。



## クロさん

レイカたちがまほろば遊園地を調査している最中に出会った男性。青鬼に詳しいが、危険人物のようだ。



## ハルナ先生

レイカたちやひろしが通う北部小学校の教師。クロさんの裏切りによって心に深い傷を負い、一時期学校を休んでいた。



# 青鬼

あおおに

## クワズ

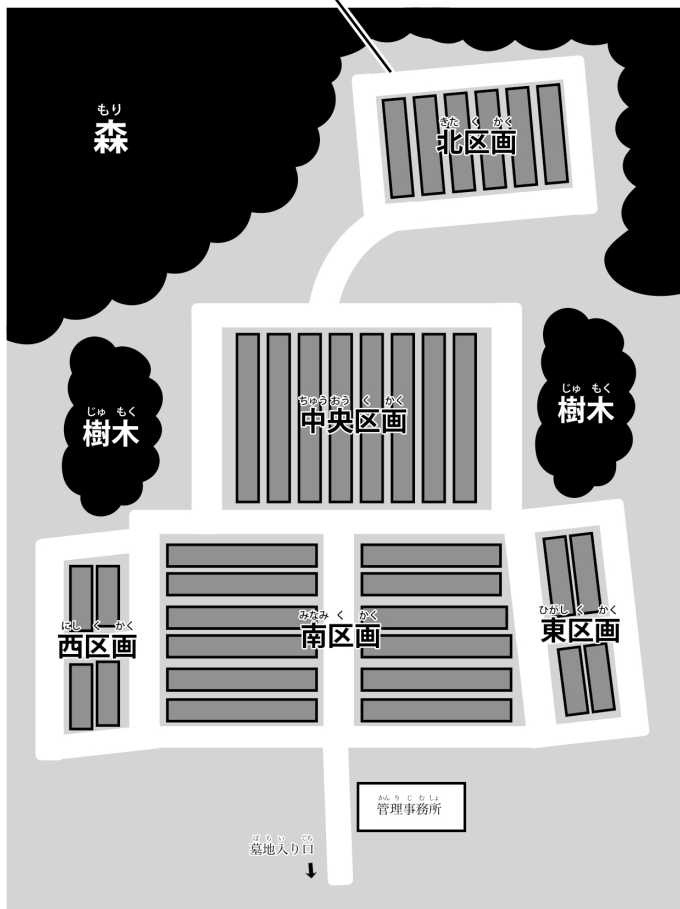
### 調査

碧奥墓地のMAP	006
人形屋敷の見取り図	007
1 ドロドロに溶けた人影	008
2 ハルナ先生とひろし君	021
3 探偵ズナちゃん	034
4 碧奥墓地	043
5 暗い森の幽霊屋敷	059
6 日本人形と無限廊下	069
7 ブルーベリー色の乱入者	084
8 捕まっちゃったの部屋	096
9 逃げ回れ!	106
10 地下倉庫の式神	127
11 あいちゃん	148
12 青鬼ホカク作戦	162
13 寄り添う二人	180
青鬼調査レポート	184
碧奥墓地のMAP その2	186
人形屋敷の見取り図 その2	187

へき お ぼ ち  
碧奥墓地のMAP

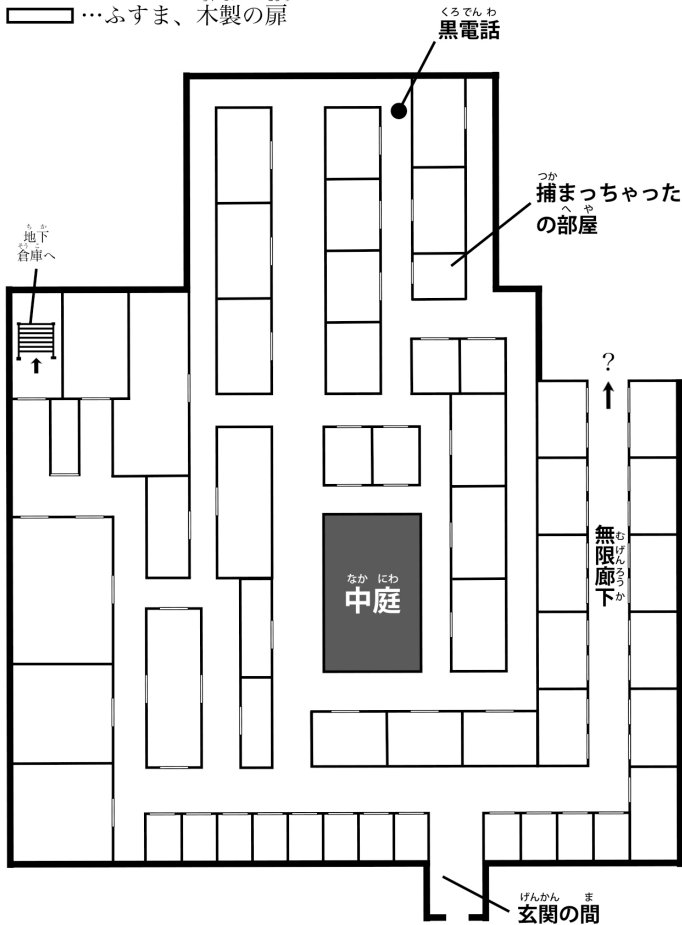
もり ぼ ち さかいめ  
森と墓地の境目

はか れつ  
…お墓の列



み と ず  
にんぎょう や しき  
人形屋敷の見取り図

〇〇…ふすま、木製の扉



# 1 ドロドロに溶けた人影

九月二十三日、放課後。

授業を終えたわたしは、オカルト調査クラブの部室に向かっていた。

最近あまり暑くない日が少しずつ増えてきていて、本格的な秋の訪れが近いことを感じる。ついこの間まで、じんわりとした熱を帯びていた廊下もずいぶん涼しくなった。

部室のドアをガラリと開けると、スマホで誰かと通話しているゲンノウさんが目に入る。

「——ふむ、キミの頼みは理解した。確かにそれはオカルト現象かもしれない。急ぐのであれば、すぐに調査に取りかかっても良いが……なるほど、承知したよ」

ゲンノウさんはわたしに気がついたようで、手を少しだけ持ち上げて「すまないね」というような仕草をしてみせた。

わたしは小さくうなずき、いつもの席に座る。

ゲンノウさんの電話内容はオカルト関係のもののようにだ。

邪魔しないよう、通話が終わるまでゲンノウさんをぼんやり眺めて待つことにする。





「——では日程の調整が済んだら、また連絡をくれたまえ」  
少ししてからゲンノウさんは電話を切り、ゆつくりとわたしに向き直った。  
「静かにしてもらって悪かったね、レイカ君」

「全然大丈夫ですよ。新しいオカルト調査の依頼が来たんですか？」

わたしは好奇心を隠しきれずにたずねる。大変な目にあうことも多いが、やはりオカルトに係る話を耳にすると、自然とワクワクしてしまう性格は変わらない。

ゲンノウさんはにやつと笑みを浮かべた。

「ふつ、やはり気になったかね？ 久しぶりに青鬼とは無関係の、幽霊に関する相談が来た。ゼヒレイカ君たちにも協力してもらいたいのだが——」

「もちろん協力します！」

わたしが食い気味に答えて立ち上がると、ゲンノウさんは愉快そうにパンと手を叩く。

「それでこそレイカ君だ。ここところが危険なことが多かったからね。息抜きをかねて、オカルト調査といこうじやないか」

「調査はいつ頃始めますか？ この後すぐ？」

「気持ちわかるが、少し落ち着きたまえ。依頼主のほうで、調査を行うための許可を取る必要があるらしくてね。早くても数日後くらいになりそうだ」

「そ、そうですか……すみません、一人で先走ってしまつて」

少しグイグイといきすぎてしまった。

わたしは反省して椅子に深く腰かけ直す。

「いや、レイカ君にはそうやってオカルトに目を輝かせている姿が合っているさ。私としては元  
気なレイカ君を見られて満足だよ」

ゲンノウさんがそんな言葉を口にしたのは、『兵隊の王』の一件があつたからだと思つた。

最近では『兵隊の王』——ソルの天文台襲撃、シヨツピングモールでの戦いがあつたため、わたしは常に気を張つていて、笑顔を浮かべる機会が少なかった。

他人のことをあまり気にしないゲンノウさんでさえ心配するくらい、わたしは追い詰められていたのだらう。

一連の事件を通してソルと仲良くなり、普通の学校生活に戻つてからは、少しずつ心に余裕が生まれてきている。

しばらくは平和に過ごしたいというのが本音だ。

青鬼と関係のないオカルト調査は危険も少ない。一呼吸置くにはちょうどいい活動になるだらう。

「依頼はどんな内容なんですか？」

そう質問すると、ゲンノウさんは通話中に走り書きをしていたらしいメモを取り出した。

「依頼は市営の墓地である『碧奥墓地』の調査。最近、奇妙なウワサや多数の目撃情報があるから調べてほしい、と市の職員から連絡をもらった。実は私もそのウワサは前々から耳にしているね。ちやうどいい機会だと思つて引き受けたのさ」

「奇妙なウワサ？」

わたしが首をかしげて聞き返すと、ゲンノウさんは怪しく笑みを浮かべた。

「『碧奥墓地』には、真つ黒でドロドロに溶けた人影が現れる』。簡単にまとめると、そのような内容だよ」

「ドロドロに溶けた人影……?」

「うむ。実際には輪郭があいまいで、溶けたアイスのように形が崩れている、という意味だと私は解釈しているがね。ドロドロと溶けたような人影が墓地をさまよい歩いている。なんとも面白そうな光景じゃないか!」

そうやって語るゲンノウさんの瞳は、少年のようにとても澄んでいた。

わたしもその光景にはかなり興味がある。

しかし一つ、あんまり乗り気になれない要素があつた。

それは場所が墓地だということだ。

ワクワクした気持ちで訪れていい場所ではない。

そのことはゲンノウさんも十分にわかっていたようだ。わたしが自分の考えを口にする前に、ゲンノウさんは少し真面目な表情になった。

「レイカ君には言うまでもないことだと思うが……墓地では騒がず、静かに調査を行うつもりでいる。墓地というのは死者が眠る場所だ。その場所を単純な興味本位で訪れるのは、死者に対して失礼だと私は考えているんだ。オカルトへの興味や情熱は持ちつつも、現場では冷静に依頼の調査を進める。ドロドロに溶けた人影の正体を突き止め、人々が安心して墓参りを行えるようにする。それが今回の調査の目的だ。レイカ君も賛成してくれるね？」

ゲンノウさんは墓地でもオカルトスイッチ全開で暴れるのではと思っていたが、それは余計な心配だったらしい。

ゲンノウさんはとても真剣な目つきでわたしを見つめてくる。

だからわたしも真剣に考えて、それからうなずいた。

「ゲンノウさんの意見に賛成します。でも意外ですね。ゲンノウさんはどんな場所でも、オカルトを追うことしか考えない人だと思っていました」

わたしの言葉を聞いて、ゲンノウさんはふっと笑った。

「たしかに私の普段の様子を見ていたら、そう思うのが自然だろう。だが私は『オカルト民俗学者』だからね」

「どういう意味ですか？」

関連性がよくわからない。

そんなわたしに対して、ゲンノウさんは丁寧に説明を始めた。

「民俗学というものの中には、大切な人間が亡くなって別れを迎えた時、どうやって気持ちの整理をつけるか、そのためにはどんなふう埋葬すればいいか、亡くなった人間を忘れないためにはどうするべきか、など死者との向き合い方を考える内容も含まれるのだよ。私はオカルトが大好きだが、生きている人間たちが死者とつながりを保つための場所、つまり墓地を汚すつもりはない。死者への敬意を忘れたこともないよ」

その説明を聞いてわたしはあることに気づく。

「もしかして——だから、クロさんに『オカルト学者』と呼び間違えられたことを根に持っていないんですか？」

クロさんは初めて会った時、ゲンノウさんのことを単にオカルト学者と呼んだ。

その小さな間違いにゲンノウさんはずいぶんこだわっていたので、少し違和感があったのだ。

しかし、きちんとした想いがあつて『オカルト民俗学者』をわざわざ名乗っているのだとしたら、その反応にも納得がいく。

実際のゲンノウさんの回答は、

「さてどうだろうね。レイカ君の想像に任せるよ」

というもので、上手くはぐらかされてしまったが、そう言いながら微笑んだゲンノウさんを見れば、わたしの予想が間違っていないことは明らかだった。

最後の最後で本音を口にしないところは、実にゲンノウさんらしいとも言える。

「今回の依頼の内容はこんなところだ。あとは碧奥墓地の調査許可が正式に下りるまで、少し待つていてくれたまえ。先に準備をしておくといい」

「はい。青鬼を相手にする時と同じ道具を用意しておきますね」

ドロドロに溶けた人影というのが本物の幽霊かどうかは不明だが、「火のない所に煙は立たぬ」ということわざもある。

ウワサが広まっているということは、それ相応の理由があるはずだ。

「あとこれは……ウワサと関係があるかはわからないのだが」

ゲンノウさんは窓の外に目をやって、少し声のトーンを落とす。

「碧奥墓地へ墓参りに行った人間が数名、行方不明になつていふ話も耳にしたことがある。依頼をしてきた市の職員はそれについて触れなかったがね。行方不明の話はウソかもしれないし、誰かの勘違いかもしれない。しかし、用心しておいて損はないはずだ」

「わかりました」

わたしは大きくうなずいた。

そういえば……とゲンノウさんは元の調子に戻ると、話題を変えるようにくるりとこちらを向く。

「レイカ君はエキサイドシネマの事件を知っているかい？ 君が碧奥モールで過ごしていた時に起こったのだが」

エキサイドシネマというのは、駅前商店街の近くにある映画館の名前だ。わたしも何度か家族で行ったことがある。

「その事件なら、家に帰ってからネットの記事で見ました。『映画館に三匹のサルが乱入』って書いてありましたけど——」

「——知っているなら話が早い。どうやらあの事件は青鬼によるものみたいだよ」

わたしは大きくため息をついた。



やつぱり、というのが正直な感想だ。

「そんな気はしてました。町中の映画館にサルが現れるわけないですからね。それも三匹も」

どこかおかしなニュースの裏には、青鬼の存在が隠れていることが多い。

たとえば、碧奥天文台の展示棟は青鬼との戦闘で壊されたけれど、ニュースでは「天文台研究員を襲撃した犯人、展示棟も破壊か」という実起こった出来事とはかけ離れた内容になっていた。

人間の犯人が天井からつりさげられた、巨大な惑星模型を引きちぎることなどできるはずがないし、そもそもそんなことをする理由がない。

またソルが操っていた四体の青鬼は多数の人が目撃したにもかかわらず、最終的にはパニックになった人たちの集団幻覚として片づけられている。

同じようにエキサイドシネマの事件のニュースも、事実が大幅にねじ曲げられているのだろう。別に誰かが青鬼の存在を隠そうとしているわけじゃないと思う。

ただ、みんな信じられないのだ。

ブルーベリー色の怪物が自分のすぐ近くにひそんでいるという事実を。

「事件が起きた時にエキサイドシネマにいたという人物数名から話を聞いたのだが、はんぺん型

の青鬼あおおに三さん体たいが人前ひとまえで暴あばれたみたいだ」

わたしはわずかに顔かおをしかめる。

「最近さいきん、青鬼あおおにが人々ひとびとの前に現あらわれるケースが増ふえてきましたね。今いままでは青鬼あおおにの存在そんざいを隠かくすべきだと思おもっていましたが、こうなってくると、逆さかにその危険きけん性をしつかりと広ひろめるべきなのかもしれません。それこそ、怖いウワサという形かたちでも」

これまでわたしは青鬼あおおにの存在そんざいを公表こうひょうすると、興味本位きょうみほんいで探さがそうとする人間にんげんが増ふえて危険きけんだ、と考かんがえていた。戦たたかう手段しゅだんを持たない人間にんげんが青鬼あおおにと遭遇そうごうしてしまったら、食たべられてしまう可能性かのうせいだつてあるからだ。

しかし、青鬼あおおにはだんだんと人前ひとまえに姿すがたを現あらわすようになってきた。わざわざ探さがしにいかなくても、町中まちなかで会あってしまふ危険きけんがある。

青鬼あおおにの情報じょうほうを発信はつしんしておくことで、誰だれかを助たすけられるかもしれない。

通常個体つうじょうこたいの青鬼あおおには犬いぬが苦手にがてだとか、そういう基本きほん的な情報じょうほうを知しっているだけでも、かなり違ちがうだろう。

ゲンノウさんは賛成さんせいするようにならずく。

「私わたしたちが青鬼あおおにのことを隠かくしていても、肝心かんじんの青鬼あおおにたちが天文台てんもんだいや町中まちなかの映画館えいがかんで暴あばれるよう

は意味がない。だがいきなり『ブルーベリー色の怪物は実在する！』と警察などに言っても信じ  
てはもらえまい。まずは自分たちのできる範囲で、少しずつ情報を流していくのが賢いやり方だ  
ろう」

「ゲンノウさんには本や動画チャンネルがありますし、その辺りで青鬼を話題にしてオーケーと  
いうことにしましょうか。この前まではわたしからお願ひして、青鬼のことを秘密にしてもらっ  
ていたので、申し訳ないですけど……」

ゲンノウさんは楽しそうに口元をゆるめる。

「そんなことは気にしなくて良いさ。状況が変われば、対応も変わるのは当然のことだ。……さ  
で。レイカ君から許可をもらえたことだし、これからは喜んで青鬼について語るとしよう！ よ  
うやく情報解禁だ！ さつそく発信すべき情報をまとめなければ！」

急にテンションが上がったゲンノウさんは机の上のノートパソコンを開くと、高速で文字を打  
ちはじめる。

本当はずっと発表したくて仕方なかったのだろう。

その姿はすごく生き生きとしていた。

せつかくだし、しばらく集中させてあげようと思ひ、わたしは席を立つた。

「それじゃ、わたしは邪魔にならないように外に出でてきます。スズナちゃんはまだ来ていないので教室まで迎えにいつてきますね。優助はサッカークラブに顔を出してはらずなので、今日は来ないと思います」

「了解だ！ ふふ、情報をまとめ終えたら、すぐに青鬼に関する配信をしましょう！」

「もう配信するんですか!?!」  
そうして、とても機嫌のいいゲンノウさんに見送られながら、少し苦笑いを浮かべたわたしは部室をあとにした。